

【第1講】

明細書に書くべき内容は発明者から貰った資料（発明提案書）には書かれていません。

明細書を書くためには、書くべき対象を知らなければなりません。「何を書くのか」については、「それは発明者が説明してくれた内容に決まってるじゃないか。その内容を上位概念化して書くのが我々の仕事だろう」という程度の認識しか無い人も多いと思います。しかし、これでは「明細書のようなもの」しか書けません。

最も分かり易い例として、明細書初心者の場合について説明します（初心者じゃなくても根っこの部分では大して変わりません）。「何を書くのか」に関して、明細書初心者の多くが躓くのは「発明提案書は読んで理解できたけれど、特に大したことは書かれていなかった。明細書を作成しようと考えてはみたが、これくらいのことしか書くことが無い」と思ってしまうことです。そして、そう思う裏側では「何で、こんなものを出願するんだろう。自分なら間違いなく出願しないな。まあ、そんなものか」などと思っているのだろうと想像します。

しかし、よく考えてみて下さい。どうして発明者は、そんなものを提案してきたのでしょうか？ 発明者の頭が悪いのでしょうか？ それとも暇だったのでしょうか？ あるいはノルマがあるので嫌々提案したのでしょうか？

もちろん、発明者が我々よりバカな筈はありません。また、業務に追いかける毎日でしょうから、暇な筈もありません。仮に、ノルマが無かったとしたら、忙しい中で時間を割いて提案して来なかったとは思いますが、でも、何もアイデアが無かったとしたら、やっぱり提案して来なかったでしょうから、時間を割いて提案してきたと言うことは、ちょっとしたアイデアがあった筈です。ただ、ノルマが無くても提案する程のインパクトは無かっただけで、時間ができたら出願しても良いなと思える程度のアイデアは持っていたのです。

ところが、発明者の提案が「出願しても良いかな？と思える程度のアイデアではある」というのなら、明細書初心者が「これくらいのことしか書くことがない。何でこんなものを出願するんだろう」と思ってしまう現象については、どう考えればよいのでしょうか。

それは、発明者が提案してきた対象（忙しい発明者に時間を割かせて提案書を作成させ

たアイデアの本体)を、発明者自身が見落としているのです。仮に、アイデアが巨大なものだったら、本体も一目瞭然でしょう。ところが、発明者が提案してきたアイデアは、「ちょっと面白いことを考えた。時間ができたら出願してみても良いな」という程度のことなので、アイデアの本体（すなわち、何が自分にそう思わせているのか）を捉えることが難しいのです。ですので発明者は、それに類することをいろいろと説明するのですが、やっぱり、説明された内容には、アイデアの本体自体は書かれていないのです。だって、説明している本人が気付けていないことを説明できるわけではないのですから。そして、我々は、肝心のことが書かれていない発明提案書を読んで、「何で、こんなものを出願するのだろう」と思っているのです。

整理すると以下ようになります。（ちゃんと考えれば当然のことではあります。）

①発明者の中には「アイデアの本体」はある。

↓

②アイデアの本体が発明者に発明提案書を書かせた。

↓

③しかし、肝心のアイデアの本体自体は発明提案書に書かれていない。

↓

④発明提案書を読んでもアイデアの本体は分からない。

↓

⑤アイデアの本体が分からないから、何を書いて良いのか分からない。

ですから、我々が最初に行う事は、発明者の提案書を読んで、アイデアの本体を探り当ててやる事になります。だって、アイデアの本体を探り当てなければ、何を書いて良いのかわからないのですから。